

土木の学び

—温故知新

野球とコンクリートと 歩んできた岡村甫氏

「語り手」 岡村 甫氏 名誉会員 公立大学法人 高知工科大学 理事長

学生企画の新連載「大先輩に伺う土木の学び—温故知新」(全3回)では、土木工学の教育に長らくたずさわってこられた教授の方々に、ご自身が経験された学生生活や、教育者・研究者を通じて感じられた使命・理想・後進への期待などを伺う。第1回は、東京大学教授、高知工科大学学長を経て、現在、同理事長を務める岡村甫先生にお願いした。「消極的な理由で土木を選択したのです」とおっしゃる岡村先生が、土木工学科の教授として活躍されてこられたのはなぜか――。

消去法で選んだ道を まっとうした学生時代

――土木を専攻された動機を教えてください。

岡村――東京大学理科一類に入学した当初、私は建築学科を第一志望にしていました。自分は建築家という個人でやる仕事に向いていると単純に思っていたのですが、学部学科を決める進学振分けのときに建築と土木で迷い、

最終的に土木を選択しました。参考になるような動機ではなく、とりあえず

いますが、勉学と野球をどのように両立させていましたか。

岡村――実は、勉学とは両立していないですよ。野球が主で、勉学が従。単位が取れば卒業できたので、勉学は単位を取ることに専念し、あとは野

球をするという生活でした。学部4年を終えたら就職し、野球をしながら仕事をしようと考えていました。そのとき、卒業論文の指導教官だった國分正胤先生（たぶん）から大学院に行かないかという話をいただきました。しばらく悩んだのですが、大学で勉強を十分にできていないのに、このまま就職するのは「もったいないな」と思ったんです。そして、あと2年、学生として一人前の勉強をしてから社会に出ようと考えました。これも消極的な選択ですね。修士課程が終わる頃には、今度は大学の居心地が良くて仕事に就きたいと積極

的には思わなくなっていたので、ドクターコースに進むことにしました。研究は決して楽しくはなかったのですが、嫌でもありませんでした。そのとき、決心したのです。「ドクターに行くなら、プロフェッショナルになろう」と。そのとき初めて、これからはコンクリートの専門家になるべく行動しようと思いました。もともとは、積極的にコンクリートを専攻したわけではなく、いつのまにかコンクリートを研究することになっていたので、野球でピッチャーになったときにピッチャーの専門家になりたかったのと同じですね。

――野球を続けられた経緯や、野球が人生に与えた影響について教えてください。

岡村――野球は、中学校では3年生になってもレギュラーになれないレベル



岡村 甫氏
OKAMURA Hajime

1938年高知市生まれ。私立土佐高等学校卒業後、1957年東京大学工学部土木工学科に入学。1966年同大学院土木工学専門課程博士課程修了後、東京大学工学部専任講師、同助教授を経て、1982年同教授に就任。1999年高知工科大学副学長、2001年同学長、2009年より現職。土木学会誌編集委員長、土木学会第87代会長を務めた。東京大学硬式野球部では、選手として活躍後、助監督、監督、部長を歴任。1992年には東京六大学野球連盟理事長を務めた。

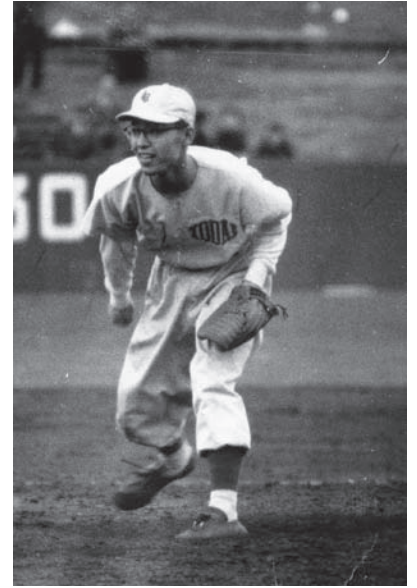


写真1 大学3年、神宮球場にて
(写真提供：岡村甫)

人生を歩んで
いました。

私は、野球

なしでは自分
の人生を語れ
ません。60歳
のとき、今ま

で自分がやつ
てきたことを

でした。でも、たまたまピッチャーに
転向したら二番手ピッチャーになれ
て、夏の一番の大会でエースの代わり
に投げて優勝したんです。高校では、
1週間だけ練習に参加したものの、自
信がなかったので野球部には入りま
せんでした。でも、2年生の終わりの
春休みに、監督から校長を通して野球
をやらないかと頼まれ、半年だけ入る
ことにしました。ここでも二番手ピッ
チャーとなり、3年生の夏の大会では
私は全試合で1点も取られなかったん
です。どなたかがこれを知っていて、
東大野球部に話が伝わり、高校3年生
の夏休みに当時大学2年生だった鈴木
武春さんが家に来て、東大では理系で
も野球ができますと教えてくれまし
た。そうやって、大学院までは、周囲
に影響されながら消極的な選択をする

振り返ってみたら、それは野球とコン
クリートだったんですよ。どちらも細
い糸でつながれて続いてきたので、少
し狂ったら全然違う人生を歩んでいた
と思います。

——その「消極的な選択」をする生き
方が変わった転機は何でしたか。

岡村——私は急に変わることはでき
ません。中学校から修士課程までは
ずっと、自分が人にどう思われている
か、どう評価されているかが気になっ
ていたんですよ。そういう自分が好き
になれなかったもので、他人からの評価
は大して意味があることではないと思
うようにしていききました。きちんと
した人であれば、私のことを変に思わ
ないだろうと意識的に発想して。だか
ら、ドクターコースに入った頃から、
自分のやりたいことをやるようになり

岡村——人が成長するというのは、本
人自身の責任が半分、周囲の環境の責
任が半分だと思っています。この考え
は、ずっと変わっていません。人は必
ず成長していきますし、成長する一生
をたどっていくほうが良いと思いま
す。そのための環境を先輩につくる義
務なり責任が、われわれ先輩にはあり
ます。

——学生が成長する環境とは、
どのようなものですか。

岡村——私が研究室で実践した

例ですと、コンクリートは、打
込みから試験するまでに時間が
かかりますよね。そこで、卒業
論文や修士論文の締切りの数週
間前に、研究室のメンバー全員
であえてスキー旅行に行くん
です。そのタイミンで旅行を設
定するということは、それまで
にコンクリートは打ち終わりに

成長する環境を、 先輩が後輩につくる

——土木工学科の教育にたずさわ
るなかで、常に意識されてきたことはあ
りますか。

岡村——人が成長するというのは、本
人自身の責任が半分、周囲の環境の責
任が半分だと思っています。この考え
は、ずっと変わっていません。人は必
ず成長していきますし、成長する一生
をたどっていくほうが良いと思いま
す。そのための環境を先輩につくる義
務なり責任が、われわれ先輩にはあり
ます。

さい、そして、コンクリートを寝かせ
ているのだから気分転換にスキーに
行きましょう、という私から学生への
メッセージなんです。野球と同じよ
うに、試合日は決まっているわけで
す。論文提出締切りという試合日まで
逆算して調整していく。そういうこと
を研究室でやっていました。これが、
私が実践していた学生のための環境づ
くりです。

それから、授業の一環として学生10
人ほどのセミナーをつくり、先生は何
を教えるても良いことになりました。私
は、歴史やスポーツ、リーダーシップ
をテーマにして、面白いと思った本を
学生に読んでもらいました。それは、



写真2 大学4年、製図室にて (写真提供：岡村甫)

土木の学び

—温故知新



写真3 修士課程1年、ダム現場にて(右) (写真提供: 岡村甫)

私ができる教育のなかで、学生にとって最も有意義だと思ったからです。たとえば、私が質問するんです、「ナポレオンやジンギスカンはなぜ強かったのですか、共通の理由は何ですか」と。私も知っているわけではありませんが、いろいろな本を読んだ末に自分なりの答えを持っています。学生の多様な意見を聞くことは、私の勉強にもなりますし、学生にとっても、今までとは違う本の読み方を学ぶ機会になったと思います。

——面白い本を学生に薦めたきっかけや目的は何ですか。

私ができる教育のなかで、学生にとって最も有意義だと思ったからです。たとえば、私が質問するんです、「ナポレオンやジンギスカンはなぜ強かったのですか、共通の理由は何ですか」と。私も知っているわけではありませんが、いろいろな本を読んだ末に自分なりの答えを持っています。学生の多様な意見を聞くことは、私の勉強にもなりますし、学生にとっても、今までとは違う本の読み方を学ぶ機会になったと思います。

——面白い本を学生に薦めたきっかけや目的は何ですか。

岡村——もともと読むことが好きなんです。35歳から数年間、休日は専門を離れて本を読むことにし、図書館で10冊、20冊借りてきては面白い本を読みました。それがきっかけでしたね。セミナーでは、学生の面白い感想が二つありました。「本を読むことは面白いことですね」ということ、「自分が何も知らないといううこと。学生のために特定の目的を持ってセミナーをしたのではなく、派生的に本を読む面白さを知ってほしいと考えていました。だから、彼らが本を読む楽しさに気付いて今でも本を積極的に読んでいることは、嬉しいことの一つです。」

恩師から学んだことを後輩にすることが、恩返し

——教育というものに関心を持たれた背景を教えてください。

岡村——國分先生という人を育てる名手のもとにいたこと、それがものすごく大きいですね。修士課程のとき、國分先生に、「今日、JISの鉄筋の

規定を作成する会議があるからついてきなさい」と言われたことがあるんですよ。私の論文は鉄筋に関係していませんから、その会議はものすごく役に立つわけですが、その日、あいにく私はネクタイをしていませんでした。これは失礼にあたるので行くべきか悩んでいたところ、先生は何も言わずに私を連れ、なんと会議へ向かう途中でネクタイを買ってくださいました。もう、かなわないでしょ。それから、私がドクターを取得して半年後、私をテキサス大学に1年半行かせてくれました。当時、先生のもので助手の働きをするのは私一人だけだったにもかかわらず。そういう一つひとつの積み重ねから、いかに振舞うべきか教えられました。



写真4 博士課程3年、研究室学生と天草の現場見学にて (写真提供: 岡村甫)

きだから読んだのですが、Ferguson教授の教科書はすべて講義ができるくらい深く読みましたし、弟子のなかで最も彼のことを知る人だと自負しています。研究の手伝いはしましたけれども、自分の時間が持てたことが他の学生との差でした。

——ご自身の研究と並行して学生の指導、教育をすることを、どのように感じていらっしゃいますか。

岡村——國分先生が私にしてくれたこと、あるいは、Ferguson教授のところで学んだことを、直接その人には返せないでしょ。だから、それと同じことを後輩にすることが恩返しだと思っています。研究は35歳頃から面白くなりました。楽しいことをやっているの

で、忙しいということはありません。実は、あまり信じてもらえないのですが、自分に研究の才能がないと思っていました。研究には独創性が必要、でも、そういう才能はない。だから、大学で生きていくとしたら他の先生たちと比べて何か優れたものを持たなければいけない。そして、考えた挙句、野球をやって監督まで務めた人間はほかにはいないから、それを活かした教育をしようと思いました。その一つが、さきほどのスキー旅行ですね。

——そのような教育を実現するうえで、困難はありませんでしたか。

岡村——私が何をしても、東大土木教室の先生方は信用してくれていると



写真5 高知工科大学理事長室と岡村先生(写真中央)

思ったんですよ。図々しいでしょ。先生方の信頼を一番得られたのは、30歳になる前に東大で起きた大学紛争(争)のときです。そのとき、みんなの本性が現れたんですよ。野球の監督をしていた私は、次に何が起こるか予測する習慣があるので、1週間後に建物が封鎖されると予想できました。そして、学生たちに、1週間後に封鎖されるけれどもどうするんだと言えたわけです。そこでの振舞いで、私がおかしくないことを理解してもらえたと思います。だから、野球の経験は私の武器なんです。「自分の武器を活かす」ことが、私が学生に望むことです。

武器のない人はいない、弱点が武器になる

——自分の武器を知ることが容易ではないと思いますが、どのように見つけるのですか。

岡村——それは難しい。武器というのはおのおのの生き方の問題ですから、そこに私は踏み込まない。右に行くか左に行くか迷ったとき、どうしますか。私はね、基本的には自分で考えます。でも、その件について自分よりも能力のある人の意見に、無意識にした

がっています。それから、学生それぞれの好みによって卒業論文のテーマを考えます。土木を専攻しているからこれを武器にしたいというのは全然ありません、学生が伸びることが一番です。修士論文や卒業論文では、研究の真似事やってもうええ良い。そこではいろいろな能力を身に付けることができますから。

——自分には武器がないと考える人もいると思いますが、アドバイスはありますか。

岡村——武器のない人はいませんが、自分の弱点が武器になりますよ。たとえば、私、ピッチャーだったでしょ。体力もない、球のスピードやコントロールもない、どうみても弱点だよね。でも、だからこそ、試合を良く見て、常に相手を見ながらピッチングを変えなければいけなかった。すると、それが上手になるんです。普通にピッチャーをやってもダメだったから、守備との連携とか、試合の駆け引きだとか、いろいろなかことを考えました。そして、弱点が長所になって、大学時代の野球でも勝てたんですよ。

研究をするときには、手法を身に付けて研究する人と、そうでない人が

ます。手法を身に付けている人は論文がいっぱい書けるんです。ところが、私には物理や数学の才能がないので手法がない。それがかえって武器になって、手法にとらわれないテーマ設定ができました。才能を活かして研究する人と一緒に、互いの強みを活かして議論を進めたので、良い研究を成し遂げられたんですよ。弱点があるということは、それを活かせば武器になります。

——最後に、土木を学ぶ学生へメッセージをお願いします。

岡村——土木とは人のためになる工学。私は、少子高齢化社会において地方がどうやっていかなければいけないかを考え、その理想を目指してこの高知で一生懸命やってきました。土木は人が生きることがをサポートする学問なんです。だから、旧来の土木にこだわらないで、考える対象を広げていってください。

(注1) 大学紛争とは、大学運営のあり方などについて、大学と学生が対立して起きる紛争。日本では1960年代後半に盛んになり、東京大学では1968〜1969年にかけて起きた。

〔取材・執筆〕

飯島 怜 学生編集委員

山下 優輔 学生編集委員